

成安寺観音堂の算額（比企郡滑川町大字福田 1205）

【時期】元治二年（一八六五）

【出題者】小林三徳

【その他】桐材、彩色。上下81×幅156

滑川町有形文化財指定

【説明】

成安寺にある算額は元治二年（一八六五）小林三徳が六十歳のとき同寺の馬頭観音堂に奉納したもので、目的は自分が解いた問題と答を書いて神仏の加護を感謝し、あわせて算学の発展を願ったものである。風化が始まっていて読めない箇所もあるが、幸い文献（1）（2）にはかなりの精度で原文が掲載されている。「関流悉統 小林三徳翁」とあるので関流の算者であったようであるが、その伝系は不明である。

この算額には願主三徳をたたえる序文がつけられ、また門人十四名、同志十七名、談友八名、談柄四名、志主二名の計四十五名の和算家が名を連ねている。範囲は遠く江戸、近くは菅谷・広野・越畑等の人たちであり、かなり盛況であったようである。

三徳をたたえる序文の読み下しは次のようなものである。『夫れ数術は六芸の一にして人生の急務、一日も無くして済むべからざる者なり。大は之れ則ち日月の会食、小は則ち金穀の出納、これに因らずして其の詳を取らざるなり。猶方円を為すには必ず規矩に於てするごとし。伝に曰く孔子かつて委吏と為て曰く「會計は当るのみ」孔子の大聖と雖も尚この術を講究す以て知るべし。福田邸小林氏幼きより此の技能を研精し、其の奥秘を造詣し、広く教を郷党の子弟に布く、其の誘掖を受くる者数うるに勝るべからず。今ここに孟春扁額を製し以て之を同邸の大悲閣に掲げんと欲し、予の一言を題する事を謂う。固辞すれども命を得ず。因つて数語を弁じ其の概を識して云う』算額の内容は立方体・円・三角錐の問題で三乗根、平方根を求めるものである。

○一里之間開平二千百六十間

一步一米積一兆六千七(百)九十

六億千六百万歩巾六尺路行

二千百六十里厚巾一間長三

里六分四斗入六十四万七七

三十俵四四九八余

前問再纂土積百億〇〇七千

七六九六千坪歸二百十六而

大坪四千六六五万六千實而

開立方面問

○術曰立天元一得開法式減實商三

百六十間一里四方六面也

(注) $\sqrt[3]{46,656,000} = 360$

○玉周五寸方面一寸二分五釐

歩積 一千九百五十三步一

分二釐五毫 此積箔一數五

厘但三寸坪 三万九千六十

二坪五分也厚五微余爲本坪

九十七坪六分五釐六毛二五

忽也實以平法而方面問

○術曰以天元之一得開法式減

實著商九間八分八厘二毛一

絲四方余也

(注) $\sqrt[3]{97,65625} = 9,8821$

○蕎麥形本積二百四十九坪五



成安寺観音堂（平成22年5月）



成安寺観音堂の算額（平成22年5月）

分四釐七毫八絲也加積法一
千三百三十一坪實而歸開立
方面問

○術曰立天元之一得開法式滅
實著商十一間三角也

元治二年寢在乙丑蒼天日

(注)



参考文献

- (1) 「滑川村史調査報告書 民俗資料 第2集」 田中義一 (滑川村、1980年発行) 22頁。
(2) 「埼玉の算額」 (埼玉県史料集第二集 埼玉県立図書館発行 昭和四十四年)

(平成二十二年六月二十三日)

